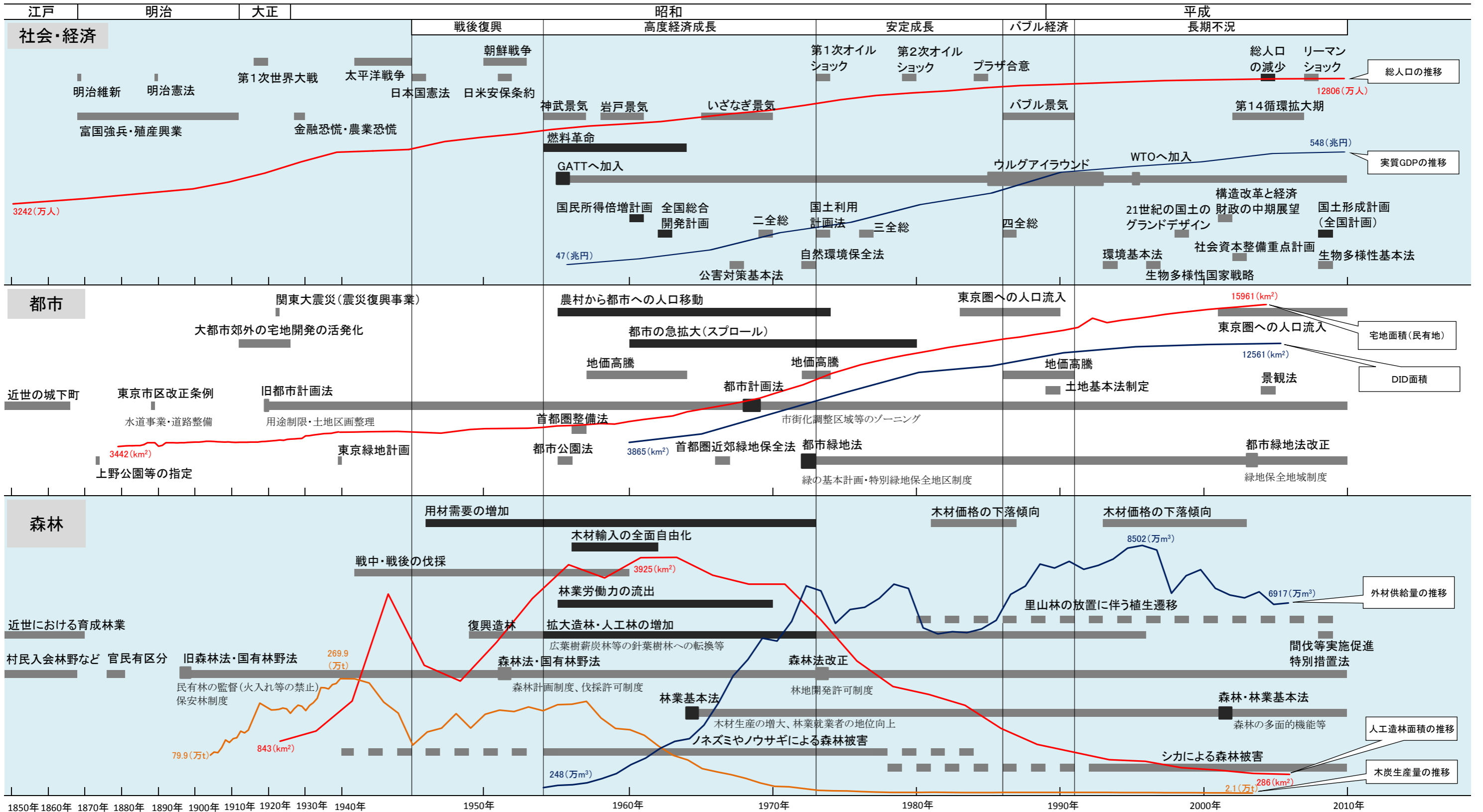


# 1850年以降の国土利用の経緯(社会・経済、都市、森林)

<全般> 高度経済成長期には全国総合開発計画などにより経済成長に適した国土利用が模索され、各生態系の利用と管理のあり方が大きく変化した。1970年代後半と1990年代には経済成長や人口増が鈍化し、各生態系の利用と管理に環境の視点を取り入れられるようになった。

<都市> 高度経済成長期の農村からの大規模な人口移動によって急速に拡大し、スプロールや地価高騰などの都市問題が生じた。これに対応して都市計画や都市緑地の制度が形成された。

<森林> 戦後復興と高度経済成長に伴う木材需要に応えるため人工林が拡大した。林業は産業としての効率化を図るが、外材の輸入自由化・林業労働力の流出・木材価格の下落によって管理の問題が生じている。



注: 引用・参考文献は、資料1-2にまとめて掲載した。